昭和29年に誕生した成田市、昭和30年に誕生した下総町・大栄町では、市政・町政の発展に向けて、新庁舎を整備し産業を進展させるなど、着実に歩み始めました。

❶「白亜の殿堂」と呼ばれた成田市の新庁舎❷門前町に合わせた和の装いの京成成田駅舎❸滑河駅前通りで行われた盆踊り大会（昭和32年）❹下総町で開催された耕運機競技会（昭和35年）❺舗装前の大栄地区の町道（昭和30年頃）❻昭和33年の大須賀中学校

した。大栄町では、昭和30年の合併当初から、新農村建設計画事業の実施に着手し、農地の現状把握を進めていきました。

そして昭和33年、下総町・大栄町ともに「新農村建設の町村」の指定を受け、機械化や経営規模の拡大といった農業の近代化に向けて動き出しました。

学校教育の整備が進む

当時の市町村が担う事務として重要視されていた学校教育の整備も進められていきました。

成田市では、昭和37年に市内初の鉄筋校舎が成田小学校に完成し、昭和39年には公津中学校と八生中学校を統合して、西中学校が誕生しました。

下総町では、昭和33年に、滑河中学校・小御門中学校・高岡中学校の3校を統合し下総中学校が誕生。大栄町では、昭和32年に第三小学校（のちに川上小学校）が開校し、大須賀小学校桜田分校が独立して桜田小学校が設立されるなど、教育環境が整えられていきました。

昭和31年～38年の出来事

昭和31年	2月	大栄町役場新庁舎が完成
	3月	下総町役場新庁舎が完成
昭和32年	4月	第三小学校（のちに川上小学校）が開校
	4月	桜田小学校が独立
昭和33年	4月	下総中学校が開校
	9月	京成成田駅舎が完成
	10月	成田市役所新庁舎が完成
昭和35年	11月	大栄町で町章を制定
昭和36年	9月	エスエス製薬の成田市への進出が決定
昭和37年	10月	成田市初の鉄筋校舎、成田小学校校舎が完成
昭和38年	1月	成田山新勝寺周辺の道路で正月の交通規制が始まる

成田高校が甲子園に出場

昭和30年、県下に“成高旋風”が吹き荒れました。当時、夏の甲子園大会に出場するためには、県大会を勝ち抜いた後、南関東大会で優勝する必要がありました。

成田高校は、県大会決勝で千葉第一高校（現千葉高校）を破り、南関東大会に進出。勢いそのままに数々の強豪校を破り優勝し、夏の甲子園大会に出場しました。

市制施行2年目を祝福するような偉業に、市民は大いに盛り上がり、壮行会は盛大を極めたとのことです。

甲子園のグラウンドを堂々と

記念撮影をする成高ナイン

シリーズ成田市70年②

市政・町政の発展に向けて

新庁舎が完成して市政・町政が本格始動

昭和の大合併が進められる中、誕生した成田市・下総町・大栄町はそれぞれ旧成田町役場・旧滑河町役場・旧昭栄村役場を庁舎として使用していましたが、手狭であったことなどから新庁舎建設は優先的に取り組まれていました。

昭和31年2月には、大栄町の新庁舎が完成しました。大栄町広報（昭和31年2月10日）では「名実共に皆さんのものの大栄町庁舎です」と紹介されています。

昭和31年3月には下総町の新庁舎が完成。下総町広報（昭和31年5月5日）では、「竣工式盛大に挙行」とし、滑河小学校で行われた竣工式の様子を伝えています。当日はあいにくの雨にもかかわらず、多数の出席者が集まり「会場は全く溢るるばかり」と表現されています。

成田市の新庁舎が完成したのは、昭和33年10月のことでした。建設地決定後、木更津航空自衛隊の派遣を要請し、ブルドーザーによる造成工事が行われ、45日間で整地作業が完了。昭和33年4月に起工式が行われ、10月まで建設工事が進められました。新庁舎落成式は、東久邇稔彦親王（ひがしくになるひこ）をはじめ700人の来賓を迎え、「市制施行5周年式典」「『世界連邦平和都市宣言』記念式典」も兼ねて、盛大に行われました。

成田市には新たな工場が進出

高度経済成長の波を受け、国内の産業構造が変化してきた昭和30年代。成田市・下総町・大栄町では依然として農業が主要な産業でした。

成田市では、農業のほかに、ようかんを主とする食品工業があったものの、新たな雇用を創出する必要があり、市の財政強化を図るためにも工場誘致は不可欠とされていました。昭和36年9月、市の誘致運動が功を奏し、エスエス製薬の進出が決定。昭和39年7月に南平台に成田工場が完成しました。

一方で、下総町と大栄町では「新農村建設の町村」の指定を目指し、取り組みを進めていきました。下総町では昭和32年に農村振興協議会を結成して、運動の体制を整えま